

全体討論

牧野：大妻女子大学の牧野智和といいます。自己啓発の言説とかを追っていて、手帳のことを研究していることがあって、そのモノ性みたいなことを考えたくて、今日、ここに来ました。

Actor Network Theory (ANT) のことは勉強の途中なんですけど、だから、さっき森啓輔さんがおっしゃっていたことも僕は気になっていて、Actor Network 観というのは植田さんにも聴いてみたいと思ったんです。マテリアルな次元に注目するとして、それはいったい今までの研究と比べたときに、何を新しく見ている、あるいは、何かに注目する度合いが、それこそ今までのいろんなエスノグラフィーであったりと比べたときにどう違ってくるのか。あるいは、モノであれば成り立つってというような話なのか。その視点を入れたことで、つまり、マテリアルな次元っていうふうに打ち出したことで、今までの研究とどういう点が変わってくるのかってのが、僕自身があまりうまく説明できないところがあって、それをちょっと教えてほしいなってというのが植田さんへの質問です。

岩館さんにも聴いてみたくて、エージェンシーが人間・非人間に同様に配分されてないって話は非常によく言われていて、で、周辺の諸分野からも、それはちょっとどうだろうって話があって、岩館さんもそういう向きがあったと思います。ANT の知見を使ったとして、これはエージェンシーが均等に配分されているとか配分されていないとかって見立てが、実際に研究成果にどう関わってくるのかなってところなんです。さっきの岩館さんの報告にあったネットワークは、エージェンシーが等価に配分されているって見立てで行った場合と、等価に配分されていないって見立てで行った場合とで、いったい研究のどこに違いが出てくるのか、成果物のどこに違いが出てくるのかなってのが気になって、そこをちょっと教えていただけると嬉しいです。

植田：ありがとうございます。おっしゃっていただいた点は、答えが正直出ていないところです。まだ、明確にこれが違いますって答えは出せていません。ただ、今までの社会学が、社会学者なのでその文脈で話しますけれども、モノをどう扱ってきたのかというと、たとえばマルクス主義の社会学であれば材料とか、あるいは資源として扱ってきたわけで、その配分や分配の問題として考えられてきたように思うんです。そういう意味で、扱うのか扱わないのかという次元では、別に今までの社会学だっていくらでもモノを扱ってきたし、その意味では、別に何か新しいことをやっているということにはならないのだろうと思っています。

ただ、特に都市って文脈で考えた場合に、今までは、モノってというのは、道路であれ電線であれビルや建物であれ、都市社会のある意味で外側にある入れ物のようなものとして、あるいは、都市社会を成り立たせるための資源だったりとして扱われてきたけれども、そうスッキリ分けられないような現実があるような実感が、たとえば震災のときなんかにはあった。だから何が変わるのかと言われると、まだ難しいところはあるけれども、そういったものも含めた対象の設定の仕方というか、問題領域の設定の仕方として、モノというものを今までと違った形で組み込んで都市というものを考えていけないか、そういう必要があるんじゃないかというようなことを、考えています。

それをやって何が違ってくるかということ、たぶん因果性のメカニズムを理論的にどう考えて

いくのかっていうモデルの立て方が、だいぶ変わってくるのかなと思っていて、先ほどの三浦さんのコメントにも関連するんですけど、もちろん *assemblage* アプローチと政治経済学の接合というのは、竹に木を継ぐようなところがあるので、どちらかがどちらかの長所を殺しかねないというのは分かっていると。分ったうえで、なんでそんな無謀なことをここで考えているかという、私の場合は、政治経済学的な研究の完全決定の問題というか、経済構造で全部説明してしまうところの間をどうやって埋めていくのかっていうところを考えていて、完全に偶発的でもなく、かといって完全に初期条件に決定されるわけでもない間のところで、どう水路づけを考えるかというところを考えていきたいというのがあります。たとえば、Louis Althusser が重層的決定っていうことを言っているけれども、それは、おそらく哲学の領域ではすごく深められているけれども、社会学はちゃんと引き受けられてないような気がしているわけです。その間を詰めていくときに、モノを含めたネットワークというか、*assemblage*、かたまり、集合体みたいなものを対象に据えることによって、物的な初期条件に完全に規定されるかそういった議論ではない形でのモデルの立て方ができないかということを思っているということがあります。それが今までの研究とどう違うのかというと、その「今まで」に何を代入するかによってだいぶ違ってくると思うんですけども、そのようなことを思いながら、この作業をしているところがあります。何が革新的かって言われると、まだ「これが」っていうところまではいかないんですけども、そういう野心は持っているというところでしょうか。

岩館: 植田さんと同じく、僕もまだ、ご質問に対する答えを明確には出しきれていないのですが、いくらか考えていることはあります。ひとつには、自分が学んでいる都市社会学の文脈でいうと、空間をひとつの切り口にしながら、権力や身体のことを見ようとしてきたと。だけれども、やっぱりモノの作用とか、モノの方が先に動いていく事態、都市のなかで水があふれるとか、水道管から水があふれていってどこに流れていくかわからないみたいな事態が進展していくってこと自体は、なんていうか……

<会場の電気ポットのアラーム音>

岩館: なんか、モノに主体が……

難波: 訴えてる……

岩館: 実際の身体とか人間が行為するレベルにおいて、モノが動くことによって、人が都市のなかで翻弄されていく動きっていうのは、やっぱり十分追えていなかったんじゃないかなと思うんです。水道のように、人間の生存を基底的な部分で支えているものが動くことによって、人間とか組織の方が、逆に後追いで翻弄されていく動きみたいなものを、もう少しちゃんと描きたいところから、僕の場合はモノへの着目が始まったように思います。なので、今回のインフラ危機分析であれば、インフラのネットワークを構成しているモノの動きを見る必要がやっぱりあって、その時に Actor Network Theory の知見が使えないかと思っています。その意味で、エージェンシーの均等な配分ということには、そこまでこだわっていないのかもしれませんが。

もうひとつは、僕も植田さんと一緒に、決定論をどう考えるかということが、もう一段抽象的な次元であります。政治経済的なアプローチをとると、最終的には資本の問題であり構造の

ところで決定されている問題となる。他方で、ミクロなアプローチをとると、そこにはそういうネットワークがあったからということになり、その間をどうやって埋めていったらいいのか、という問いがあります。そのときに、モノの統治不可能性の部分が何か手がかりにならないかと思っています。モノを介して思わぬところで人と人がつながる、コンピュータにカビが生えるとか、氷土壁作ったら全然動かないとか。いい例ではないのですが、モノが人間の意図を超えていってしまう部分、意識には完全に含みきれない部分に着目することで、社会で生きている人間とかそこで起こっている出来事を、社会学なり学知が豊かに捉えていくためのひとつのポイントがあるんじゃないかと、今日のやりとりを含めながら感じているところです。

植田:いかがでしょうか。まだ、あと少しだけ、時間がありますけれども。

難波:こんなにたくさん、大勢の方がいらしてくださって、すごく嬉しいんですけど・・・

植田:本当に、これでも予想していたよりは、だいぶん。

さっきの *assemblage* アプローチの話にしても、*Actor Network Theory* (ANT) にしても、社会学が導入しようとしたときには、厳密な形で導入するっていうことは、かなり難しいし、それは今までも Foucault だってなんだって、その通りの形では導入してないっていうところでは、その分野の方から見たらすごくいい加減だし、歪曲していることにもなるんだろうと思うんです。そこは今日の森元齋さんのお話で勇気づけられたとして、けれども、そのときにいったい *assemblage* アプローチとか ANT みたいなものをどういう意味で引き取るのかっていうことは、本当に考えなければいけないと、あらためて思いました。もちろん、それを導入するときには、その分野の方から見れば許されないようなことを、おそらく、いっぱいやることになるわけですね。

引き取り方のひとつには、人から成る社会という対象だけではない、モノも含めたような形の領域というか存在があり得ることを認めて、そこへと社会学の対象を拡張させていくというような引き取り方があるんだろうとは思いますが、それは同時に、因果性とか、何が何を規定するのかっていうモデルだとか、そうしたところをどう考えるのかっていうところでも、ややこしい問題を引き受けることになるわけですね。引き取り方によっては、これまで社会学が蓄積してきたいろいろな概念だとか理論だとか、そういったものが一切合財無効化されるかもしれない。とはいえ、片方だけ引き取って片方は知らない顔をするっていうのは、理論的にはずるい話で、飲むなら丸ごとっていうことにはなるんだけど、でも、そこを何かかうまいこと加工して接木していかなければいけないとも思うわけです。その場合、それはいったい何の学問をやっていることになるのかっていうところで、さらにややこしい問題が出てくるわけですが、でも、それも含めて、常に変化を拒まずに考えていかなければいけないなど、あらためて思っています。

今日、これだけの方に集まっていたいて、本当にありがたく思います。我々が今編集している *Disaster, Infrastructure and Society* (DIS) という雑誌が、どれほどのバイアスをもっているのかということも、よく自覚したうえで、この先の作業を進めていきたいと思っています。本日はありがとうございました。